

妬みによって就学前児の行動は変化するのか —悪性・良性妬みに着目して—

吉沢 和

【序論】

妬みは、他者が持っている優れたものを欲したときや、相手にそれを失ってほしいと思ったときに生じる感情である (Parrot & Smith, 1993)。最近の研究によって妬みには2種類あると言われている。1つが優れた他者を引き摺り下ろしたいというモチベーションが含まれている「悪性妬み」、もう1つが他者の成功や所有物を自身のそれと比較して悔しいと思うと同時に、自身を向上させたいというモチベーションが含まれている「良性妬み」である (Sterling et al., 2016)。

子どもにおける妬み研究では、多くが悪性妬みに注目しており、良性妬みを調べた研究は少ない (e.g. López et al., 2012; Recio & Quintanilla, 2015)。また、子ども対象に妬みを測定している研究は、子どもに第3者的な立場から他者の妬みを評価させている (López et al., 2012; Recio & Quintanilla, 2015; Gaviria et al., 2021) ため、子ども自身が抱いた妬みを調べた研究は管見の限りない。したがって本研究では、子ども自身の妬みを詳細に調べるために、悪性・良性妬みが生じやすい場面を設定した実験を行った。

本研究の目的は、6歳児を対象とし悪性・良性妬みが生じた際に、異なる行動がみられるかを検討することであった。就学前児が実際に妬みを抱いた際の行動を測定した研究がなかったため、本研究は成人を対象に妬みを操作した Lange & Crusius (2015) の研究を参考に実験を行った。また、先行研究から、各妬み誘発後に好意度を測定すると、2つの好意度に差が生じることがわかっている (Lange & Crusius, 2015)。しかし、同研究では良性妬みで好意度があがったのか、悪性妬みで好意度がさがったのかは不明瞭である。そこで本研究では児を対象に、悪性妬みと良性妬みを誘発する操作の前後で比較対象に対する好意度を尋ね、その変化を探索的に調査した。

【方法】

本研究では、課題に示されている図形のなぞれた個数を競う「なぞり書き大会」という場面を設け、参加児が比較対象に負ける状況を作った。その後、悪性・良性妬みを誘発させるために優勝者がコメントしている動画を参加児に提示し各妬みに基づく行動の測定を行った。悪性妬みを誘発させるコメントは「僕(私)は天才だから優勝したよ」で、良性妬みを誘発させるコメントは「僕(私)は頑張ったから優勝したよ」であった。また、この操作の前後において、参加児の比較対象に対する好意度を測定した。

次に、悪性妬みを測定するために、優勝者が再度なぞり書き大会に参加することを伝え、そこで優勝者に取り組んでほしい課題の難易度を選択させた。その後、良性妬みを測定するため、参加児に2回目のなぞり書き大会において最初の課題と同じものに再度取り組んでもらった。ここでは、最初のなぞり書き大会での成績と2回目のなぞり書き大会の成績を比較した。仮説Ⅰは、「悪性妬みが生じた際に参加児は難易度の高い課題を選択する」で、仮説Ⅱは、「良性妬みが誘発された場合に、1回目よりも2回目で課題の成績が高くなる」であった。

【結果】

分析対象児は、平均月齢 73.34 ヶ月児 61 名であった。各条件における悪性妬みに基づく他者を引き摺り下ろす行動を検討するために、条件を独立変数、子どもの選択(比較対象に次に挑戦してもらう課題

として難しい課題を選択するか、1回目と同様の難易度の課題を選択するか)を従属変数とする GLM を実施したところ、条件間の子どもの選択の違いはみられなかった ($\chi^2(1) = 1.84, p = .17$)。しかし、それぞれの条件で難易度の高い課題を選択する割合をチャンスレベルと比較した結果、悪性妬み誘発条件で難しい課題を選択した割合はチャンスレベル (50%) よりも有意に高く (80%, $p = .002$)、良性妬み誘発条件では難しい課題を選択していた割合はチャンスレベルと比較して有意差がみられなかった (64.52%, $p = .111$)。このことから、悪性妬み誘発条件では他者を引き摺り下ろそうとする行動が多くみられたが、良性妬み誘発条件においてはこのような傾向はみられなかった。

また、良性妬みに基づく自身を向上させようとする行動がみられるかを調べるために、条件と試行回数、それらの交互作用を独立変数、参加児のなぞり書き課題の成績を従属変数、参加者 ID をランダム効果とした、ポアソン分布に基づく GLMM を行ったところ、条件 ($\chi^2(1) = 1.83, p = .18$)、条件と試行回数の交互作用 ($\chi^2(1) = .04, p = .84$)は有意ではなかったが、試行回数の主効果が有意であった ($\chi^2(1) = 11.18, p < .001$)。つまり、条件に関わらず、1回目よりも2回目のなぞり書き課題の成績が高いことが示された。

また、探索的な調査であった、各妬み誘発操作前後の好意度に関して、各条件における好意度の差分 (2回目 - 1回目) を従属変数、条件を独立変数として LM を実施した。その結果、条件間に差が見られ、良性妬み誘発条件の好意度の変化の方が、悪性妬み誘発条件における好意度の変化よりも、高くなっていた (Estimate = .88, SE = .38, $t = 2.29, p < .05$)。また、悪性妬み誘発条件における好意度の変化は、チャンスレベル (= 0) との有意差がみられなかった (Estimate = -.27, SE = .27, $t = -.97, p = .34$)。これ対して、良性妬み誘発条件ではチャンスレベルより有意に好意度が増加した (Estimate = .61, SE = .27, $t = 2.27, p < .05$)。このことから、悪性妬み誘発条件では1回目と2回目の好意度に変化はみられなかったが、良性妬み誘発条件では、2回目の好意度得点が1回目の好意度得点よりも高いことがわかった。

【考察】

悪性妬みに基づく行動(高い難易度の課題を選択する)は、悪性妬み誘発条件のみで多くみられたが、良性妬みに基づく行動(2回目のなぞり書き課題を1回目より頑張る)は、両条件でみられた。したがって、6歳児は成人と同様に悪性妬みを抱いた際に、他者を引き摺り下ろそうとするが、生じた妬みの種類に関わらず、自身を向上させようと頑張ることがわかった。この結果から、仮説 I は支持されたが、仮説 II が支持されなかった。仮説 II が支持されなかった原因として、2回行ったなぞり書き大会で同じ課題を使用したことから、繰り返しの効果が生じた可能性があることや、先行研究 (Rhodes, & Brickman, 2008) で言われているように、幼い子ども他者よりも自分が劣っていると認識しても、そこから回復する力を持っていたなどの理由が考えられる。

今後の研究の方向性としては、成人を対象とした先行研究 (e.g., Adrianson & Ramdhani, 2014) で、悪性妬みは西洋文化でみられやすく、良性妬みは東洋文化でみられやすいというような、文化圏によって悪性・良性妬みの想起のされやすさが異なることがわかっていることから、子どもでも妬みに関する文化差がみられるのかを検討することなどが考えられる。

子どもの妬みをより深く知るために、今後もさらなる研究が求められる (比較発達心理学)。